

大明小学校 校長室から

令和元年11月14日

No. 41

文責 校長 飯久保一男

文化発表会へのご参加ありがとうございました。子どもたちの気持ちのこもった発表をご覧いただけたことと思います。感想や意見等をお寄せください。今後の取り組みに生かしたいと思います。

色彩感覚

まさしく、芸術の秋です。子どもたちは、文化発表会と並行し、図工・美術大会の作品にも取り組んでいました。今号は、日本人が育んできた色彩感覚について書かせていただきます。

江戸時代に、幕府は「奢侈禁止令」を出し、庶民のぜいたくを禁じました。庶民が木綿と麻以外の素材を着ることを禁止令でした。色についても高貴な色とされてきた紫や、紅色などの色を着ることを禁止しました。そして、庶民が着るふさわしい色として、茶色、鼠色など目立たない地味な色を強制したのです。この禁止令は、たびたび出され、そのたびに内容が厳しくなり、幕府は庶民の暮らしの締め付けを強めていきました。幕府の「百姓は生かさぬように、殺さぬように」という農民観が、260年の幕府体制の中で、忠実に守り続けられていたことがよくわかる事例です。



しかし、そんな中でも、人々によって「四十八茶百鼠」といわれる繊細な色彩感覚が生み出されました。茶色や鼠色など、限られた地味な色の中に、わずかな違いを楽しむ美的センスが逆に生まれたのです。日本人の美的な色彩の感覚とたくましさの伝わる話です。

…四十八茶百鼠とは、茶系、鼠色（灰色）系の染色のバリエーションを指す言葉です。「四十八」「百」は「たくさん」という意味です。実際には茶系も鼠色系もそれ以上のバリエーションがあったそうです。（裏面参照してください）

私は、図工で、水彩絵の具の使い方の指導をするときに「絵の具会社の色を信じてはいけない」（語弊があります…保護者に絵の具の会社の関係者がいたらゴメンナサイ）という言い方をすることがあります。例えば、「水色」です。日本には、青系の色だけでも50種類以上もの色の名前（後述参照してください）があるのです。それなのに、青と白を混ぜた色に「水色」と名前を付けてしまったのです。もし、名付けた人がいるのなら、私は大声で文句を言いたいと思っています。「あの色に『水色』という名前を付けたから、小学生が水をかくときにあの色を使ってしまうじゃないですか！」



- ①水道の蛇口から「水色」の水が出てきたらどうだ？ おいしそうと思って飲むか？
②「水色」の雨が降ってきたらどうする？ 白い服が水玉模様になるかもしれないぞ。

子どもたちにこんな話をすると、「水は『水色』ではない」ことを意識してくれます。



…ちなみに、今、子どもたちが持っている絵の具には「水色」という名前の色はありません。ペンテルでは「そらいろ」、サクラでは「セルリアンブルー」となっています。私と同じように感じた人が文句を言ったのでしょうか？ 「そらいろ」もちょっとなあとはいいますが…

以前には「肌色」という名前の色があったことをご存知でしょうか。絵の具にもクレヨンにも色鉛筆にもありました。これは差別用語とみなされ名前を変えたとのことです。「肌色」があったときは、子どもたちは、顔も、手も、足もみんな「肌色」でかきましたから、この名前はなくなってもよかったと思っています。また、知らず知らずのうちに子どもたちの中にできてしまう、変な色の感覚があります。土は茶色、木も茶色、葉は緑、髪の毛は黒、唇は赤…、などのことです。こういう感覚も指導の中で変えてやりたいと思います。

…髪の毛は黒 ←これも今の時代では差別用語になるのでしょうか？

先日、朝の情報番組で、500色の色鉛筆が話題になっていました。図工・美術の教員としては、つい食指が動きそうになります。私は84色の色鉛筆セットは持っていますが、さすがに、これはすごいと思ってしまいました。色鉛筆は、絵の具のように混ぜて色をつくることはできませんので、数が多い方がいいのです。500色もあると右の写真のように並べれば、素敵なインテリアにもなりそうです。これは、日本の会社の製品です。こういう細かな色彩感覚が日本人にはあるのです。この日本人独特の色彩感覚は、前述のように日本の風土や歴史が大きく関わっています。



…日本人は、日本の歴史が長いことにあまり自覚をもっていませんが、他の国に侵略されることなく、高度で自立した文化が長く続いてきたことは、世界史の中ではあまり例を見ません。日本は、長期にわたって独自の文化を育んだ結果、世界の中でもユニークな存在になっています。四季ははっきりとし、山々は四季折々の色を見せ、適度に狭い国土の中で文化の交流も盛んに行われてきました。虹の色をとっても、日本では「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」の7色とされますが、国によっては虹の色を2色とするところまであるとのこと。



アメリカに行ったときに、トイレの手洗い場のハンドソープを押してみても、手をひっこめた経験があります。何と蛍光ピンクの液体が出てきたのです。日本のハンドソープといえば、白、緑などです。日本では衛生や安全を表す色といえば、緑です。それも淡い緑です。トイレでは緑色のハンドソープをよく目にし、床なども緑に塗られていることが多くあります。日本とアメリカの色に対する感覚の違いに驚いた一つの例です。

日本では、観光地などで、景観に配慮されて、コンビニなどの派手な看板が、セピア色のものを見かけることもあります。日本人の細やかな配慮のような気がしています。

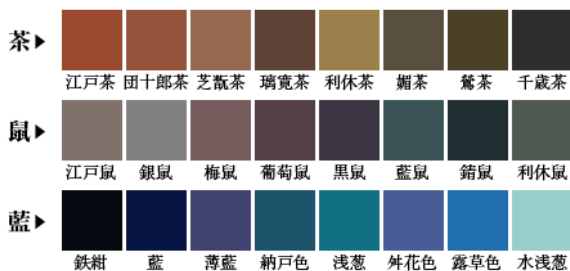
…外国はどうなのかまでよく調べていません。右の写真は鳴沢村にあるコンビニです。富士山の景観に配慮してこの色にしてあるようです。



水色の例もありますが、日本では、青系の色の名前だけでも、

藍色、蒼、群青、杜若色、桔梗色、紺色、菖蒲色、董色、鉄紺、瑠璃色、浅葱…

と50以上の名前があります。しかも、同じ色ではなく、すべて微妙に違う色です。もちろん、赤や緑など



のそれぞれの色にもたくさんの色の名前があります。当然、これらもすべて微妙に違う色です。ある調査によると、日本には1,000以上の色の名前があるそうです。これは、世界にも例がないようです。日本のアニメーションが、世界で高い評価を受けているのは、こういう日本人の繊細な色彩のセンスがあるからではないかとも思っています。

本校は、ふるさとに誇りをもち、グローバル社会の中で様々な人々と協働できる資質の育成をめざしています。そのためには、まず、ふるさとのよさ＝日本のよさを理解することが必要です。四季に恵まれ、歴史の中で繊細な色彩の感覚を育んできた日本の伝統を引き継ぎ、子どもたちの中に育てることに取り組んでいきたいと思ひます。

色彩感覚に限らず、こういった伝統や、人々の努力・創意工夫によって生み出された一つ一つの日本のよさを子どもたちに伝えていくことは、子どもたちよりも長く生きている私たち大人（教師たるものはもちろん）の義務であると思ひています。